



田中家石材

全優店
全額現金取引

tanakaya-communication

田中家通信

発行/田中家石材
彦根市高宮町108-1 TEL.0749-24-2789

VOL. 8

お墓を建てる時期

お墓を建てる時期には一定の決まりというものはありませんが、四十九日、百ヶ日、一周忌、三回忌、お盆、春・秋のお彼岸等法要時に行うことが一般的には多いです。

お墓をいつ建てるかは時期ではなく、御先祖様への供養の気持ちで建てるのがよいでしょう。

最近では生前に建てる方も多くなっています。生前にお墓を建てることを寿陵(じゅりょう)と言い、大変縁起の良いことと昔からされており、家運繁栄を願って生前墓を建立されます。

また生前にお墓を用意しておけば安心だというほかに、これは節税対策にもなるものです。というのは、お墓には相続税や固定資産税などがからなからいからです。もし、遺族が遺産の相続を受けた後でお墓を建てることになると、相続税を引かれた後でお墓を建てることとなります。しかし、生前に建てておけば、お墓を建てた費用分だけ相続税のかかる遺産が減っているため節税対策になるのです。

供養をはじめるのに早すぎると言われることはありません。お墓は帰るところ。先祖が土にかえった場所、われわれもまたいずれかえる場所です。かえる場所があればこそ、安心して仕事も生活も旅にも出られます。すなわちかえる場所とは、待ってくれている人がいるということです。

七五三



七五三(しちごさん)とは、男の子は三歳と五歳、女の子は三歳と七歳の年の十一月十五日に、成長を祝って神社・氏神などに詣でる行事のこと。本来は数え年だが、現在は満年齢で行われることもある。

七五三のお祝いは、もとは江戸時代の武家社会において、幼い子供達が少年・少女として社会に迎えられていくという意味で、子供の成長の節目にあたって行われていました。

男児女児は共に三歳になると七五三の最初の儀式である「髪置き(かみおき)」を行ないます。

昔は、赤ちゃんの頃から三歳頃までは頭髪を刈るのが一般的でしたが、これはこの歳を機に初めて髪を伸ばして結び整える儀式で、赤ちゃんから幼児へ成長した事を祝うものでした。

続いて男児の五歳は「袴儀(はかまぎ)」を行ないます。これは五歳になった男児が始めて袴を着用し、幼児から子供へと成長した事を祝う儀式です。これに対して女児七歳は「帯解(おびどき)」の儀式を行ないます。

これはそれまでつけていたつけ帯を解き、初めて本式の大人の着ける幅広の帯を締める儀式です。現在でも着用されている七五三の衣装は本来このような意味があるものなのです。



賞えておきたい

語源・由来

「蓮花生(いちれんたくしやう)」
良くも悪くも同じ運命をたどること、一緒に行動すること。追いつめられて、運を天にまかせせるような場面を使うことが多い。

仏像が蓮華をかたどった台座に置かれている。これは泥中でありながら美しい花を咲かせる蓮を、煩惱のなかからさとりの花を咲かせる、仏教の心に通じるものがあるからだという。

本来は、来世も一緒にと願うものたちの祈りからきた言葉。極楽浄土では、誰もが蓮華の上に生まれ変わるという。

来世こそ同じ蓮華の上に生まれて結ばれたいと願って、心中した恋人たちの哀れな夢でもあった。

「おあいそ」

おあいそとは、飲食店でのお勘定や勘定書。「おあいそう」とも。

おあいそは、本来、お店側が「お愛想がなくて申し訳ありません」などと断りを言いながら、お客に勘定書を示していた言葉である。

語源のままであれば、お客が「おあいそして」と言うと、「こんな店には愛想が尽きたから清算してくれ」という意味になる。

「急がば回れ」

急がば回れとは、急ぐときには危険な近道より、遠くても安全な本道を通るほうが結局早い。安全で着実な方法を取れという戒め。

急がば回れの語源は、宗長(室町時代の連歌師)の歌「もののふの矢橋の船は速けれど急がば回れ瀬田の長橋」である。

「もののふ」とは武士、「やばせの舟」とは矢橋の渡しを意味する。



「矢橋の渡し」とは、東海道五十三次草津宿(滋賀県草津市矢橋港)と大津宿(大津市石場港)を結んだ湖上水運で、「瀬田の長橋」とは、日本三大名橋のひとつ「瀬田の唐橋」である。

当時、京都へ向かうには、矢橋から琵琶湖を横断する海路の方が、瀬田の唐橋経由の陸路よりも近くて速いのだが、比叡山から吹き下ろされる突風(比叡おろし)により危険な航路だったため、このような歌が歌われた。



近江商人と祖先崇拜

近江商人の活発な経営活動を支えていた精神的バックボーンは何かというと、それは神仏を敬い祖先崇拜にうらうちされた宗教的儒教道徳であった。その中で特に、「勤勉」、「始末(儉約)」、「正直」、「堅実」の四点だと指摘されている。

「勤勉」は、この世に生まれてきた以上、勤勉に働くことによつて社会に奉仕することであり、その報酬として収入を得て家を豊かにすることが、結果的に祖先や社会に対して報恩感謝奉仕の行となることであった。

「始末(儉約)」は、他の中の人々のおかげで物を手に入れ、感謝して大切に使用していただき、お金も始末して、合理的に儉約することによつて蓄財を果たし、それを子孫に継承させれば、家の安泰を図ることができる。これによつて、モノに感謝する気持がモノを大切にすることを生んだ。

「正直」は、人をだましたり、人の弱身につけ込んでアコギな商法をしたら、けつして神仏は許してくれないだろうと考えた。

「堅実」は、堅く強く商売していれば、家が傾くこともないし、ましてや破産することもない。そうすれば信用を得て無形の財産となる。

こうした考えが精神的支柱となつていった過程の一部に、祖先崇拜が大きな助けになっていました。

